

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520651

研究課題名（和文） 家形埴輪群と豪族居館の地域での在り方

研究課題名（英文） The Relationship between House-shaped *haniwas* and Mansions of powerful clan in the Regions in the Kofun period

研究代表者

橋本 博文 (HASHIMOTO HIROFUMI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：20198691

研究成果の概要（和文）：当初企画していた群馬県赤堀茶臼山古墳の家形埴輪群と毒島城遺跡の豪族居館との対応関係の調査・研究は、後者が中世の城館址として伊勢崎市指定遺跡となっているということで残念ながら計画変更せざるを得なくなった。それを承けて、同じ地域圏に存在する今井学校遺跡の豪族居館の発掘をとおして渡来人の存在形態が明らかになった。奈良県極楽寺ヒビキ遺跡と室宮山古墳の家形埴輪のように対応関係がつかめるものが存在する。

研究成果の概要（英文）：Regrettably, the investigation and the research of the relationship between the house type clay image group from the Akabori chausu-yama old tomb and the mansion of powerful clan of the Busujima-jo site in Gunma Prefecture could not help doing the plan as that had been planned at first change, Because the latter was the Isesaki City designation ruins as a castle and mansion in the Middle Ages. Introduction person's existence form was clarified by excavating the mansion of powerful clan of the Imai-gakko site in same region. Something that the relation can be gripped like Gokuraku-ji -hibiki site and the house type clay image of the Muro-miyayama old tomb in Nara Prefecture exists.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：古墳時代、豪族居館、家形埴輪、渡来人

1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者はこれまでに栃木県さくら市四斗蒔遺跡で古墳時代前期の居館の実態を明らかにしてきた。それと前後して栃木県下

では同じく前期の小山市下犬塚遺跡、矢板市堀越遺跡、中期の小山市成沢遺跡、宇都宮市杉村遺跡が発掘調査され、栃木県下の古墳時代豪族居館の実態が臆気ながら見えてきた。

しかし、十分な報告書が刊行されていないものもあり、その地域の中での豪族居館の変遷過程が必ずしも把握されているとは言い難い。

群馬県でも、古墳時代前期の太田市中溝・深町遺跡、中期の前橋市梅ノ木遺跡、同・荒砥・荒子遺跡、同・丸山遺跡、太田市水久保遺跡、後期の伊勢崎市原之城遺跡、同・今井学校遺跡などの豪族居館の発掘調査が相次いだ。

(2)研究代表者は、平成10年度の科学研究費基盤研究(C)の「古墳時代豪族居館と奥津城との対応関係」をテーマに、栃木県さくら市四斗蒔遺跡とその至近にあるお旗塚古墳の対応関係を探る両遺跡の発掘調査を試みた。その結果、古墳時代前期の同時期性と同一規模であることを確かめることができた。ここに、居館と古墳とは規模の上で密接な相関関係があることを明らかにした。その後、四斗蒔遺跡1号居館の大型住居址から出土したほぼ完形の畿内系叩き甕が布留0式に相当することを把握した。さらに同遺構から検出された炉の熱残留磁気年代測定を日本の熱残留磁気年代測定の第一人者である富山大学教授広岡氏に依頼し、その結果A.D.220±25年というデータを得た。一方で、同一地域圏にある小山市寺野東遺跡のやや先行する土器群を出土した竪穴住居址の同じく炉の熱残留磁気年代測定を他の研究者(株パレオ・ラボ)が実施して、それに近い年代のデータを得ていることを知った。そこで、同じく布留0式の土器を出土している奈良県箸墓古墳の年代観と古墳時代の開始年代が気になりだした。

(3)平成14年度には科学研究費基盤研究(C)で「弥生時代、古墳時代の時代区分と実年代の再検討」と題して、年輪年代測定の結果や土器の併行関係の検討を行った。その結果、箸墓古墳は卑弥呼の没年に近い3世紀中頃の古墳である可能性が高いことと、魏の皇帝から「親魏倭王」の印綬を授かった卑弥呼こそ、古墳時代の和政権の初代の王として相応しいとした。すなわち、この段階には四斗蒔遺跡に見られるような既に定型化した豪族居館が出現しているということである。魏志東夷伝倭人条に記された卑弥呼の居館と古墳時代の豪族居館がリンクしてくることになる。一昨年、国立歴史民俗博物館のチー

ムが放射性炭素同位体年代測定で、箸墓古墳の年代を3世紀中頃と発表して物議を醸した。自然化学分析については、慎重にならざるを得ないが、幾つもの違った方法論によって検証されることが望まれる。

(4)その後、研究代表者は、家形埴輪群の出土で著名な群馬県伊勢崎市赤堀茶臼山古墳の至近に存在する毒島城遺跡で赤堀茶臼山古墳の年代に近い須恵器や土師器を採集した。その立地からして赤堀茶臼山古墳の被葬者の豪族居館の可能性が高いことから、先ず測量調査を実施した。その上で平成19年度の科学研究費基盤研究(C)で「家形埴輪と豪族居館の地域での在り方」というテーマにより、3年間の毒島城遺跡の本格的な発掘調査を計画した。その前年、調査は認められたものの、同遺跡が中世の城館址ということで地元伊勢崎市の指定を受けているということから、その下層の古墳時代の層までの掘り下げを原則的に認められないとして一部サブトレンチによる土層確認に終わった。

(5)ここに、毒島城遺跡の継続的な調査は断念せざるをえなくなり、次の新たな変更プランを練った。そこで、同一地域圏に存在する今井学校遺跡が注目されることとなった。すなわち、今井学校遺跡は地元教育委員会が開発行為に先立つ事前調査で居館のコーナーを確認していたが、十分な報告書も刊行されておらず、その規模や遺跡の範囲も確定されていなかった。その一方で、居館内からは唯一最大の竪穴住居にのみL字形カマド(オンドル)が付設されていた。また、それに伴った円筒状土製品の存在も気になった。以上から、対象は今井学校遺跡の発掘調査に移っていった。

2. 研究の目的

(1)当初、毒島城遺跡と赤堀茶臼山古墳との間で古墳時代の豪族居館と対応関係にあると考えられる古墳の家形埴輪群とその実際の建物址との関係を検討しようとしたが、目的は果たされないことになった。そこで、次善の策として、同一地域圏に存在する後期の豪族居館、今井学校遺跡の発掘調査によって、渡来人の豪族居館との関係を探ることになった。付近には1km圏内に前橋市大室古墳群が存在し、一部家形埴輪も出土しているので、その中に渡来的要素のある建物を表現し

たものが無いかを探ることは可能かと判断された。

(2)一方で、本来の家形埴輪と居館との関係に関しては、赤堀茶臼山古墳出土家形埴輪のうちの1点と酷似する家形埴輪が同一地域に存在する伊勢崎市釜ノ口遺跡の3号竪穴住居址からほぼ完形で出土していることを知った。そこで両者の対応関係を探ることも目的とした。

3. 研究の方法

1年次目は、当初の計画を大幅に変更し、群馬県伊勢崎市今井学校遺跡の範囲確認をめざして、南西部・南部・南東部にトレンチを入れて発掘調査を行った。

2年次目は、1年次目の成果をもとに、内部の大型住居を中心に面的な遺構発掘調査を実施した。また、居館内部の中心部に近い部分で遺構確認のための発掘区を設定した。

さらに南辺外郭施設の柵列が想定される位置にトレンチを設定して遺構確認を試みた。その上で、柵列の平面実測、空中写真撮影を実施し、平面剥離標本の作製を行った。

3年次目は、その柵列の立面方向の断ち割りを柵列の走行方向に平行する方向と直交する方向で一部試みた。その記録として断面図取り、写真撮影、断面剥離標本の作製を行った。その他、北西辺中央の出入り口施設の精査を面的に進めた。また、1号住居址のカマドの精査を試みた。特に、一部袖部にサブトレンチを入れ、構造の把握に努めた。

一方、付近の原之城遺跡の地形測量を実施し、その過程で表面採集された遺物の実測・写真撮影など記録化に努めた。

他に、今井学校遺跡の既発掘資料の遺物再整理、一部土器実測などを行った。加えてL字形カマドの確認された9号住居址のカマドや柵列等の遺構写真などの複写を実施した。

また、当初予定していた赤堀茶臼山古墳の出土遺物の検討会（埴輪研究会主催）に出席し、意見交換した。併せて、出土埴輪などを写真撮影した。

さらに、前述した赤堀茶臼山古墳出土家形埴輪と酷似する家形埴輪を出土した遺跡竪穴住居址のそれを比較することにした。

4. 研究成果

同じ地域圏に存在する同市今井学校遺跡の豪族居館の調査に切り替えて、測量調査・発掘調査を実施した。その結果として、今井学校遺跡の1辺約80mという全体の規模と外郭施設の堀の規模・形態、火山性堆積物との関係、内部の竪穴住居址の存在、居館内外の古墳の存在、堀底面からの土製円板の出土が明らかになった。それによって、今井学校遺跡の三ツ寺I遺跡に追隨する規模が知れ、この伊勢崎地域に原之城遺跡に次ぐ大型居館が存在することが判明した。また、鏡を模したと推定される土製円板の出土から居館内部に祭祀遺構が存在する可能性が高まった。堀堆積土中の火山性堆積土の関係から、居館の造営は、榛名山噴火火山灰(Hr-FA)の降下後と判断された。出土土器は少ないものの、6世紀後半代のものと推定される。①西辺中央には張り出し部は無く、出入り口部と考えられる土橋が確認された。②南東部の堀が検出されたが、そこでコーナーを形成せずに、粕川に向かって直線的に延び、浅くなって途切れてしまうことが明らかになった。③柵列は以前北部で確認されていた芯々約90cm間隔の円形の掘り方を持つピットが大小交互に連なるもので、4本ごとに控え柱を伴う構造であることが追認された。④1号竪穴住居址は北東辺の中央にカマドをもつもので、9号竪穴住居址のようなL字形カマドではないことが知れた。また、4本の支柱穴を有し、カマドに向かって右手に貯蔵穴が存在することが明らかになった。⑤1号竪穴住居址から大量の土器が出土した。その器種構成や形態・技法的特徴、伴出須恵器の年代観等から6世紀初頭という時期が判明した。⑥中央部南側の空間利用を検討しようとしたが、残念ながら元々の遺構の有無がつかめないほどに大規模な攪乱が入っていることが明らかになった。⑦1号竪穴住居址からは鉄鎌が出土し、農具の所有形態についての一資料を提供した。⑧1号竪穴住居址から赤色顔料が確認され、群馬県内の竪穴住居址出土資料を集成した。⑨円筒形土製品が1号竪穴住居址から出土し、カマドの構築材の可能性を想定したが、カマドには未使用だった。

なお、以前の調査で、今井学校遺跡の内部から大型竪穴住居址が確認されていたが、その出土土器の整理を併せて実施した。実測の結果、6世紀後半代のものと認められた。さ

らにその住居に見られたL字形カマドの問題を検討した。その結果、朝鮮半島南部の、石を構築材に使わないL字形カマドとの類似が指摘できた。居館内部に半島系の渡来人が存在し、首長に重用されていたことがうかがえた。ここに、古墳時代豪族居館と渡来人との関係が全国的に見て初めて明らかになったことは重要である。

特に、渡来人の存在形態には、A類：渡来人が首長、あるいはそれを補佐するナンバー2として存在するもの、B類：豪族居館内に抱えられているもの、C類：居館外の隣接地に存在するものなどがあげられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①橋本博文、古墳時代の豪族居館と生産組織、國學院雑誌、査読無、109巻第11号、2008、20-37

[学会発表] (計1件)

①橋本博文、古墳時代の豪族居館と渡来人の存在形態、日本考古学協会、第74回総会、2008年5月25日、東海大学

[図書] (計3件)

①橋本博文、他、新潟大学人文学部、新潟大学考古学研究室調査研究報告第10集(群馬県伊勢崎市原之城遺跡測量調査概要報告・今井学校遺跡発掘調査報告)、2010、84

②橋本博文、他、新潟大学人文学部、新潟大学考古学研究室調査研究報告第9集(群馬県伊勢崎市原之城遺跡測量調査概要報告・今井学校遺跡発掘調査報告)、2009、84

③橋本博文、他、新潟大学人文学部、新潟大学考古学研究室調査研究報告第8集(群馬県伊勢崎市今井学校遺跡調査報告)、2008、72

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

橋本 博文 (HASHIMOTO HIROFUMI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号: 20198691

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携分担者

()

研究者番号: